

2020年12月期上期決算説明会における主な質疑応答内容
(2021年8月10日開催 於：オンライン)

<自動車事業>

Q：上期の赤字から下期に黒字化する想定だが、足元の状況と下期予想の確からしさはどの程度か？

A：自動車産業でパワーユニットの変革が進行するなか、排ガス関連ビジネスが従前のレベルまで戻るのには難しいと考えているが、足元では新しい規制への対応に向け需要がゆるやかに回復している感触がある。製品リードタイムが長いこともあり、上期までの受注残で下期売上高の見込達成は問題ないと考えており、通期予想の修正は行わなかった。

Q：自動車産業で電動化関連の投資が増えてきているなか、MCT（自動車計測）・ECT（自動車開発全般に関わるエンジニアリング・試験）ビジネスが大幅成長にならないのは、新たなプレイヤーとの関係が構築できていないのではないかと？

A：自動車産業の研究開発において、新たなプレイヤーの参入で全体の投資のボリュームが増加、一気に受注が加速するという事は考えにくい。たとえば中国では自動車電動化に向けて新規参入が増えたものの、淘汰も起きている。そのような状況でも、ECT ビジネスにおいてはトルコの TOGG 社やイスラエルの REE 社など新しいプレイヤーからのプロジェクト受注を受け、取引関係を構築している。

<半導体事業>

Q：現在の受注は顧客の先行手配か実需か？

A：実需と先行手配での在庫確保との組み合わせではないか。安全在庫としてマスフローコントローラー（MFC）を確保したいだけでなく、先行手配もありながら、実需のほうが強いと考えている。

Q：製品リードタイムはどの程度か、また顧客からからはどの程度まで先の発注があるのか？

A：リードタイムは従来1か月程度のところ、一部製品で3か月程度に伸びてきている。顧客の発注は半年先納入ぐらいのものもある。

Q：現在の生産キャパシティで、どの程度までの需要増加に対応可能か？

A：現状は顧客の需要に対してほぼフル稼働で対応している。足元では生産は問題ないと考えているが、部材調達に懸念がある。長期的には生産キャパシティを増やすことも検討していく。

Q：微細化の進展により半導体製造プロセスの後工程において薬液濃度モニターの存在感が強くなっているのではないかと？

A：溶存酸素や液体中の金属成分のモニタリングなど、半導体製造プロセスの新しいパラメーターの計測に薬液濃度モニターのアプリケーションを拡大、提案している。さらに、主力製品であるMFCや薬液濃度モニ

ター以外でも、ガス計測の新技术「IRLAM」などを活用した様々なアプリケーションを提案し、半導体市場でのビジネス成長を図りたい。

<全社>

Q：全社利益の構成比において半導体事業が大きく占める状況で、近年、自動車事業に大きく割いていた設備投資の割合は変えていくのか？

A：過去、半導体事業が厳しかった時も、他事業での利益を基に投資を継続し、そのおかげで好転時に大きく成長できた。一つの事業が厳しくなっても投資を継続できるというのがマルチセグメントの特長であり、これを継続する。現状で自動車事業の業績は厳しい状態にあるが、中長期的に人の移動がなくなることはない。さらにモビリティを動かすエネルギーにおいてもソリューションを提案するのが今後の HORIBA のあり方だと考えている。

以上